的な解にこの方法を適用して、もっと複雑な解を求めることが実際に出来る。線形微分方程式を解くために、フーリエ級数とかフーリエ積分と呼ばれる数学上の道具が用いられることがあるが、これらの有効性は方程式の線形性に大きく依存している。重ね合わせの定理の④は「～が見える」という言い方を基礎付けているように思える。例えば自分のすぐ近くの特定の位置に鉛筆が見えるためには、その前提として、その位置に鉛筆が在るか無いかによって生じる、自分の目の位置での電磁場の値の差が、周囲の状況(例えばカーテンの開閉状況)に関わらず、著しい共通性を持つという事実がある。もしこの事実がなかったなら、「鉛筆が見える」という言い方は実生活で全く役に立たなかっただろう。鉛筆が見えるための前提になっているこの事実が、重ね合わせの定理の④の反映だと言いたいわけだ。

$e_3(\square, \mathrm{Y}, 0)$は連立斉一次方程式と見なされ得る。すなわち、

$$\exists\, \alpha \in \mathbb{R}(\mathrm{N}_{24} \times \mathrm{N}_3);\ \forall i \in \mathrm{N}_{24};\ \forall f \in \mathrm{F}_3;\ \hat{e}_3(i; f, \mathrm{Y}, 0) = \sum_{k \in \mathrm{N}_3} \alpha(i; k) f(k)$$

が成り立つ。このことはまず、$\hat{\alpha} \in \mathbb{R}(4 \times \mathrm{N}_{01} \times \mathrm{N}_{01})$を、

$\forall\, \xi, \eta \in \mathrm{N}_{01}$; 【1】and【2】and【3】and【4】

【1】$\hat{\alpha}(1; \xi, \eta) = (1/d)[\delta(\xi(1) + d, \eta(1)) - \delta(\xi(1), \eta(1))]$
$\times\, \delta(\xi(2), \eta(2))\, \delta(\xi(3), \eta(3))\, \delta(\xi(4), \eta(4))$

【2】$\hat{\alpha}(2; \xi, \eta) = (1/d)[\delta(\xi(2) + d, \eta(2)) - \delta(\xi(2), \eta(2))]$
$\times\, \delta(\xi(1), \eta(1))\, \delta(\xi(3), \eta(3))\, \delta(\xi(4), \eta(4))$

【3】$\hat{\alpha}(3; \xi, \eta) = (1/d)[\delta(\xi(3) + d, \eta(3)) - \delta(\xi(3), \eta(3))]$
$\times\, \delta(\xi(1), \eta(1))\, \delta(\xi(2), \eta(2))\, \delta(\xi(4), \eta(4))$

【4】$\hat{\alpha}(4; \xi, \eta) = (1/d)[\delta(\xi(4) + d, \eta(4)) - \delta(\xi(4), \eta(4))]$
$\times\, \delta(\xi(1), \eta(1))\, \delta(\xi(2), \eta(2))\, \delta(\xi(3), \eta(3))$

によって定義し、この$\hat{\alpha}$を使ってαを、

$\forall\, \xi, \eta \in \mathrm{N}_{01}$; 【1】and【2】and【3】